池波正太郎傑作壮年期短編集1

抜討ち半九郎

池波正太郎

講談社

抜討ち半九郎（ぬきうちはんくろう）
池波正太郎傑作
壮年期短編集1

定価　一三〇〇円（本体一二六二円）
第一刷発行　一九九〇年十二月　三　日
第二刷発行　一九九一年　一　月二十五日
著者　池波正太郎
発行者　野間佐和子
発行所　株式会社　講談社
東京都文京区音羽二―一二―二一　〒一一二
電話（〇三）三九四五―一一一一
印刷所　豊国印刷株式会社
製本所　株式会社黒岩大光堂
©池波豊子　一九九〇年
落丁本・乱丁本は小社書籍製作部宛にお送りください。
送料は小社負担でお取替えします。
なお、この本についてのお問い合わせは、文芸図書第二出版部宛にお願いいたします。
Printed in Japan ISBN 4-06-205181-8（文二）

抜討ち半九郎

池波正太郎傑作壮年期短編集1

装画　村上　豊
装丁　熊谷博人

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

目次

目次

猿鳴き峠……7
番犬の平九郎……45
土俵の人……77

抜討ち半九郎……113
清水一角……157
さいころ蟲……207
あばれ狼……243
解説　尾崎秀樹　282

猿鳴き峠（さるなきとうげ）

1

この峠は、駿河と甲州の境にある。

その頂上は、折り重なった山々に囲まれ、見晴しは余り利かず、甲州側へ抜ける山道の両側は、楢や杉の原始林だった。

谷間にあった無人の炭焼き小屋の焚火に一夜を明し、この日の未明、たちこめる秋の山霧を雨合羽に避け、峠へ登って来た五人の侍は、いずれも築井家の藩士である。

彼等は、やがて此処へ登って来る筈の、二人の侍を待受けているのだ。

間もなく、この峠の上で、二対五の生命を賭けた斬合いが始まろうとしている。

築井家の奥用人、玉井平太夫が、鳥居文之進という馬廻役の青年武士に討たれたのは二年前の夏のことだ。

築井家は山国の小藩で、平太夫は、もと奥祐筆頭をつとめ、城の御殿での記録文書を筆記していて、身分は十五石四人扶持という小身者だったが、能書の者の多い祐筆衆の中でも、とりわけて、その筆蹟は見事なものだった。

やがて、藩主に書道を教えるようになり、持ち前の愛嬌と機智を大いに認められ、藩主の築井土岐守は、手習いのときばかりではなく夜のお伽の相手にも呼ぶようになった。

平太夫は乱舞や鼓にも長じていたし、話術も巧みで藩主の奥方にも気に入られ、それからはと

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

んとん拍子に出世して、鳥居文之進に暗殺されたときは、五百五十石の奥用人にまでのし上がっていたのである。

奥用人といえば、御殿の奥深く、藩主の傍に附きっ切りで、身辺の用事はもとより、政事向きのことにまでも重要な発言を許される、いわば藩主の秘書のような役目で、それだけに平太夫の威勢は大きなものとなった。

藩主が一日も平太夫なくては――というほどの寵愛ぶりだし、家老達も一目置くようになり、平太夫の口利きで出世の蔓を摑もうとする取巻きの侍や部下の追従や賄賂にも馴れて、平太夫は次第に我を忘れ、慢心しはじめた。

土岐守が参勤交替で江戸の屋敷に暮らしているとき、ひそかに吉原へ案内して遊興の味を覚え込ませ、世間知らずの若い藩主を有頂天にさせたのも平太夫である。

平太夫は少年の頃から小身の家の倹しい家計に生れ育ち、中年近くになってから異常な出世をしただけに、藩主の寵愛を一身に浴びているのだという自信をハッキリと知ったときには、藩主と共に踏み入れた享楽や官能の世界――濫費のたのしさに、目もくらむような思いで溺れ込んでしまったのだ。

築井藩は五万石だが、山国だけに米も余り穫れず、風水害も多い。貧乏な藩だから、藩主の無駄遣いは、たちまちに下へ響いてきて、詰まるところは民百姓を圧迫し、底の底までも、これを搾り取るという悪い政事になるわけだ。

それでも藩の侍達は、平太夫の威勢をおそれて、蔭では嫉妬しながらも、これを咎めないばかりか、むしろ反対に、そのおこぼれを拾おうとする者が大半だったと言ってもよい。

鳥居文之進は、ついに、たまりかねて、二年前の夏の夜、平太夫が城下に囲ってある妾の家へ駕籠で出かけるところを、城下はずれの藤野川にかかっている橋のたもとに待ち伏せ、単身襲いかかり、刺し殺して逃亡したのである。

土岐守は激怒して捜索隊を八方に飛ばして文之進を追わせたが捕えることが出来なかった。

文之進は、母一人、子一人の家で、母はすぐに自害してしまい、鳥居家は取り潰され、平太夫の長男、伊織が敵討ちに出ることになった。

藩主の寵愛する玉井平太夫の敵討ちだけに大がかりなものとなり、土岐守は、この敵討ちを公儀に届出ると共に、玉井伊織の助太刀として五人の藩士を選抜した。

小西武四郎（三十六歳）

佐々木久馬（二十四歳）

樋口三右衛門（二十七歳）

それに、足軽頭という小身だが、剣術に長じている富田六郎、村井治助の二名と、故平太夫の弟で、玉井惣兵衛という四十五歳になる侍を加え、玉井家の仲間、伊之助が供について、敵討ちの旅に出発した同勢は八人だった。

2

玉井惣兵衛は勘定方をつとめていたが、ただ一人の親類として、厭でも甥の伊織に附添って行

かなくてはならなくなり、『わしは、算盤をはじくことなら誰にも負けはせんが、刀を抜くことは大きらいなのでな。困った、実に困ったことになったものだ』と、妾のおみちにこぼした。

おみちは足軽の娘で、数年前に妻が病死したまま独身の惣兵衛に仕え、その身の廻りを世話していた女中なのだが、小柄で肌が抜けるように白く、堅肥りした愛らしい女だ。

すぐに惣兵衛は、おみちに手をつけ、城下の弓張村というところへ小さな家を建ててやって、ひそかに住わせ暇さえあれば入りびたりになっていたのである。

『でも、小西様はじめ五人もの方々が助太刀についておいでになるのですから、大丈夫だと思いますわ』と、おみちは屈託なく笑うのである。

『それは、まアそうだ。甥の伊織と文之進とは互角の腕前だそうだしな。その上に小西のような一刀流の免許を持っている強いのがこっちについているのだから、まア、わしが手を下さずとも……』

おみちは声をたてて笑った。

『何が可笑しい？』と、ムキになる惣兵衛に、

『だって――だって、あなたさまが腰のものをお抜きになるところを考えると、あたくし……』

『これッ。つまらんことを言うなッ』

鼻白んで睨みつけてみたものの、惣兵衛も、思わず苦笑をさそわれてしまい、

『全くなア。戦国の世ならともかく、今更、刀を抜いて斬り合うことなどは考えただけでも馬鹿馬鹿しい』

舌打ちをして彼は、此の頃、ややたるみかけて、でっぷりと肥ってきた膝におみちを抱き寄

せ、その背中から手を廻して、やわらかな胸もとへ差し込みながら、
（兄も殿様の寵愛をいいことに、少しやりすぎたのだ。職権を利用しての収賄だけでも大へんなものだったからな。殿様を焚きつけ、自分一人が良い思いをして、のさばり返っているからこんなことになるのだ。文之進も文之進だ。何も殺さなくてもよかったではないか。若い者は短気で困る。全く困る。おかげで、わしは、彼の首をとるまでは、この可愛いおみちの肌の匂いを無理にも忘れなくてはならない……）
惣兵衛の長男は幼少の頃に亡くなり、次男はいま十五歳になるが、子供のことよりも中年になって初めて知ったおみちの奔放な、若さに満ち溢れている肉体の魅力に惣兵衛は夢中だったのだ。
若いときには養子の口もなく、小身の家の次男坊で、兄の平太夫の厄介になり、平太夫が出世してから、その引き立てで勘定方へ取り立てられ五十石の知行を貰うようになっただけに、惣兵衛は、女と言えば病身だった妻の痩せた体以外にほとんど知らないと言ってもよかった。

出発の日――藩主の土岐守は、わざわざ乗馬で城下はずれへ出て来て敵討ちの一行を見送った。異例のことだったし、それだけに藩主が亡き平太夫へ向けていた寵愛の度が強く、敵、文之進への憎しみが激しいということになる。
藩の侍達も平太夫の死には何の未練もなく、むしろ（態を見ろ）という気持の方が大きい。平太夫の出世と権力には不平満々だったし、藩主から受けている寵愛ぶりには、羨望と嫉妬でジリジリしていたのだったが、藩主みずからが見送りに出るというので、その手前仕方なく、ほとんどの藩士が伊織一行を藤野川の橋まで盛大に見送った。

玉井伊織は、十日ほど前に生れたばかりの赤児と若い妻と、父が出世を遂げてからも尚、倹しい昔の儘の控え目な暮しぶりを守っている優しい老母と別れ、気の進まない敵討ちの旅にのぼった。

（文之進が父を討った気持は、よくわかる。殿様を籠絡し、藩の綱紀と政事を乱した父が討たれるのは当り前のことなのだ）と、伊織は何度も何度も自分の胸に言い聞かせた。

小西武四郎はじめ助太刀の侍達も、自分の敵でもない文之進を討つ為に、ともすればこぼれかかる愚痴や憤懣を抑え抑え、それぞれの妻や子に別れを告げ、この厭な役目を一日も早く果して、故郷へ帰る日のことを考えつづけていた。

出発の前日、お暇の挨拶に御殿へ上がった伊織と六人の侍達に、築井土岐守は額に青筋をたてて、

『文之進を討ち果すまでは、そのほう達、死んでも帰るなッ』

癇癖の強い声で、そう命じたのである。

助太刀の侍達にしても、玉井平太夫が殺されたときには双手をあげ、

『これで悪臣が消え、殿様のお目もさめるだろう』などと、よろこび合ったものだが、藩主の怒りが、ひたすらに敵の文之進に向けられている現在、厭でも、この任務を果して来なければならなかった。

だが、独身で、槍が自慢の佐々木久馬と、仲間の伊之助だけは、激しく意気込んでいた。

久馬は敵に出会ったときの自分の働きに、冒険と昂奮と功名を思い、伊之助は、若旦那様のお供をして旦那様の敵を討つ日の感激に今から燃えていた。というのは、悪臣と言われた玉井平太

夫も、自分の家来には、下僕、女中に至るまで、仲々思いやりの深い一面があって、伊之助が女中のなかと心を交し合うようになったときも、寛大に二人を夫婦にさせて邸内の一部屋を与えてやったこともある。それだけに伊之助は、主人の悪評も耳に入らず、ただもう、文之進への恨みに徹し切っていたのだ。

3

敵の鳥居文之進は玉井平太夫を殺害するや、北国への街道を逃げにかかった。

文之進の伯父が、北国に五十万石を領する或る大名に仕え槍奉行をつとめていたからである。

築井家の捜索隊も、これを見通していち早く国境の警備を固めたし、数日のうちに伊織一行が追い迫って来たので、大胆にも文之進は、山伝いに引返して来て築井の城下町の背後を抜け、江戸へ向かった。

信州から奥羽、上州と、伊織一行に追われて、何度も危機に遭遇しつつ、文之進はその年の秋に江戸へ入り、八丁堀に道場を開いている剣客、天野平九郎のところへ逃げ込んだのである。

天野平九郎は越後新発田(しばた)の浪人で、江戸の町を荒し廻っていた八人組の浪人くずれの強盗を斬殺したという噂もあったし、奉行所の与力、同心達にも、かなり門弟がある。

文之進は剣術に熱心で、藩主の供をして参勤交替で江戸の藩邸につとめているときなどには、よく天野の道場へ出入りしていたらしい。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com